

中国電力高圧送電線鉄塔工事にともなう
大井谷城跡・半分城跡発掘調査報告書

1979年3月

出雲市教育委員会

中国電力高圧送電線鉄塔工事にともなう
大井谷城跡・半分城跡発掘調査報告書

1979年3月

出雲市教育委員会

序

このたび発掘調査を実施しました上塙治の地は、古くは『出雲国風土記』に「塙治郷」が初見され、さらに中世には累代の塙治氏がその本拠地に求めた由緒ある土地柄です。

こうした地に、特別高圧送電線鉄塔が建設されることになり、中国電力株式会社の協力を得て中世城郭の本格的な発掘調査を実施したのであります。

中世山城の調査は、県内でも前例が少ないとあわせ考えますと、今回の調査は今後の城郭研究に資するところ大であろうかと思います。

ここに、発掘調査のご指導をいただいた島根県教育委員会をはじめ、担当せられた調査員の方々、島根大学の学生諸君、地元の皆さま方のご支援に厚くお礼申しあげます。また、終始ご協力いただいた中国電力株式会社の関係各位に心から謝意を表し、調査報告書発刊のごあいさつといたします。

昭和54年3月

出雲市教育委員会

教育長 清水 寛

例　言

1. 本書は、島根医科大学への電力供給のために中国電力株式会社（以下中国電力とする）が行った高圧送電線鉄塔工事（出雲市上塩治町内、第51号、第53号）に伴う大井谷城、半分城（両城跡とも分布調査によって発見されたものであり、字名をもって城名としている）の緊急発掘調査報告である。
2. 調査は、中国電力の委託事業として、出雲市教育委員会が昭和53年11月7日から12月17日までの延べ41日を要して実施した。
3. 調査地点は、出雲市上塩治町大井谷の大井谷城西1郭と、同町半分の半分城西1郭および同地の横穴群の2箇所で以下のような調査体制で行なった。

調査員　西尾克己（島根県教育委員会文化課嘱託）

川上　稔（出雲市立出雲図書館主事）

勝部　衛（玉湯町立出雲玉作資料館主事）

調査補助員　飯田芳明、石飛公士、奥村忠孝、重本俊弘、角　真二、鳥谷芳雄、中浜久喜

野村哲也、真野　幹、山口　耕、余村達也（以上島根大学学生）

事務局　今岡　清（出雲市教育委員会社会教育課係長）

原田哲夫（　　　　同　　　　主事）

4. 調査にあたって次の方々から助言、指導を賜った。

勝部　昭（島根県教育委員会文化課係長）

村上　勇（島根県立博物館学芸員）

5. 遺物整理、掲載図面作製およびトレース、写真撮影は調査員、調査補助員が携わり、一部については井上治夫、小原明美、穴道平弘、竹内信枝、巖山和男、村上紀英子の協力を得た。

6. 本書の執筆は、I～IVについて調査員が分担し、IVを勝部　昭、今岡　清に依頼した。なお、編集は西尾克己、川上　稔の両名が担当した。

7. 調査にあたっては、地元の各位、中国電力松江支店の協力があり、また、火屋晴雄、新宮一世起、西尾良一の諸氏には助力を戴いた。

8. 本書に掲載した図面のうち、大井谷、半分の両城跡の地形測量図については、島根県教育委員会の了承を得て使用した。

また、図1の地図は建設省岡土地理院長の承認を得て転載したものである。

（承認番号、昭和54中復第233号）

9. なお、半分城西1郭に所在する半分城跡横穴群の調査報告は別に発行する予定である。

目 次

序

I 位置と環境	2
II 大井谷城跡の発掘調査	4
III 半分城跡の発掘調査	13
IV 調査に関連して	33
1. 「塩治」を名乗った武将たち	
2. 朝山、塩治地域の城跡	



大井谷城跡・半分城跡の位置図

I 位置と環境

大井谷城跡、半分城跡は、鳥根県出雲市上塩治町菅沢、半分に所在する（註1）。

両城跡とも出雲平野を貫流する斐伊川、神戸川に挟まれた山間に立地し、大井谷の背後にあたる唐墨山より派生した丘陵の先端にある。その標高は60m前後で城砦としては低く、天陥的条件は欠いているものの、前面には広大な敷倉地帯が広がり、眼下に神戸川の出口が位置し、北および西方に存在する今市、古志の台地や丘陵と対峙するなど交通・軍事上の要地にある。

また、当時の平野西部には今だに神門水滝が残り、西流する斐伊川も神戸川と同様にこの湖に注ぎ、一方、宍道湖は斐川町の中央付近まで入り込んでいたので、平野の様子も現在とは大きく異なり、面積もかなり狭かったと推定される。この様に、中世において上塩治一帯は出雲平野の中央に位置し、かつ、経済的にも安定した先進地域でもあったと考えられる。

さて、この地は古くから弥生時代から拓かれ、集落遺跡や古墳群が分布し、出雲地方の遺跡密集地の一つにかぞえられている。特に、古墳時代から奈良時代にかけては上塩治篠山古墳や地蔵山古墳および神門寺境内廐寺など、この地方を代表する遺跡も数多く存在する。

平安時代の様子は詳らかでないが、中世にはいり鎌倉時代後半には出雲守護職塩治（佐々木）氏の居館がこの地に置かれ、1341年（暦応4）に塩治高貞が横死するまで出雲国の政治的中心地となっていた。

戦国時代には、一時期尼子経久の子の興久が塩治郷一帯を領していたが、1532年（天文1）に「興久の乱」をおこして短期間で滅んでいる。文献上で明確におさえられるのはこの二時期（註2）で、その前後は不明である。

なお、上記二氏のほかに中世、神戸川下流域に割拠した豪族としては、平安時代以来の古豪朝山氏をはじめ塩治氏の一門である古志氏、保知石氏、三木氏、神西氏が知られ、それぞれ南郷に点在する小城に拠って勢力を張っていた（註3）。

次に、中世の古墓としては南宋の青磁碗を副葬していた出雲・萩原古墓（註4）が著名であり、他に、石櫃内に火葬骨を納めた背峯古墓、塩治高貞の墓と伝える神門寺境内の五輪塔、大神遺跡内の旧淨音寺址『コツンド』等が挙げられる。（西尾）

註1. この両城跡は勝部昭「出雲市上塩治町山城跡調査報告」（『季刊文化財』24号）1974によって初めて紹介されたものである。

註2. 「新修島根県史」通史篇1、1968による。

註3. 美多実「城跡」（『出雲市の文化財』第2集）1960に一部触れられている。

註4. 近藤正「出雲市萩原発見の骨蔵器について」「山陰古代文化の研究」1978を参照。

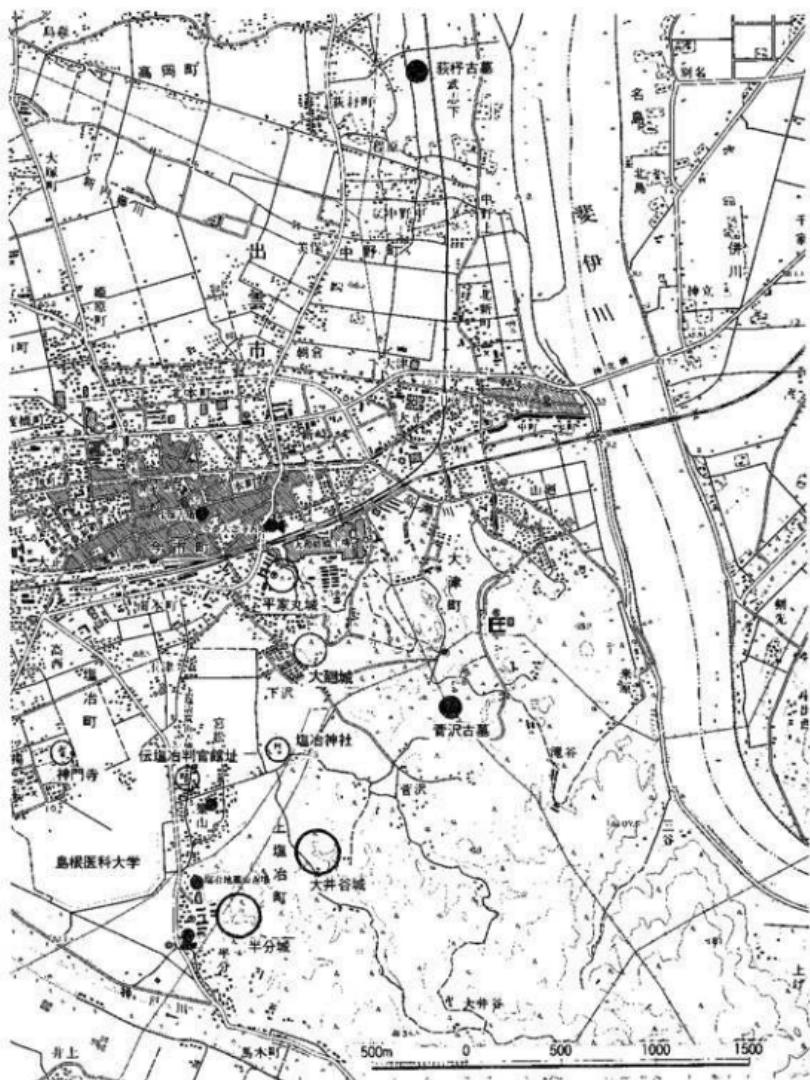


図1 大井谷城跡・半分城跡とその周辺の遺跡（宝塚古墳は塚山古墳の誤りである）

II 大井谷城跡の発掘調査

(1) 大井谷城跡調査経過

大井谷城跡の調査は、昭和53年11月7日から同11月23日の17日間に亘って実施した。調査は、凝灰岩の地山までが浅く、かつ好天に恵まれ順調に進んだが、遺構の検出の段階で地山の風化がかなりであったため多少時間を要した。以下日時を追って概述する。

11月7日 (火) 晴れ

午前中、発掘・測量器材を現地に搬入し、発掘の準備を行う。発掘の打ち合せ。午後、 3×3 mのグリッドを設定する。

11月8日 (水) 晴れ

地形測量(1/100)を開始する。調査地内の清掃後、写真の撮影を行う。

11月9日 (木) 曇り一時雨

本日より発掘に着手。表土から地山まで僅かに15cmしかないことを確認する。

11月10日 (金) 曇り

平坦部の発掘ほぼ完了。西縁辺部に石列を検出する。遺物は殆んど出土せず。

11月11日 (土) 曇り

西1郭の地形測量ほぼ完了。東側斜面で土師質土器が少量出土。

11月17日 (金) 曇り一時雨

石列直下の西側斜面の堆土作業続行。石列が北端に続くことを確認。

11月18日 (土) 晴のち曇り

平坦部の北側縁辺部で、4本柱による獨立遺構を検出。

11月20日 (月) 曇り

セクション図作製に取りかかり、土質観察用の畦をはずす。

11月22日 (水) 曇り

セクション図完成。発掘区の写真撮影・遺構の実測を始める。

11月23日 (木) 曇り

遺構の実測・平板測量を完了。すべての作業を終えて、半分城跡へ移動する。

(2) 大井谷城跡の城郭構造

大井谷城跡は、塩治神社の南に連なる低丘陵上にあり、東西の斜面は急峻で、加えて周囲は深い谷間となり中世城郭には適わしい地形である。地元で「要害山」と呼ばれる如く、一見して城と

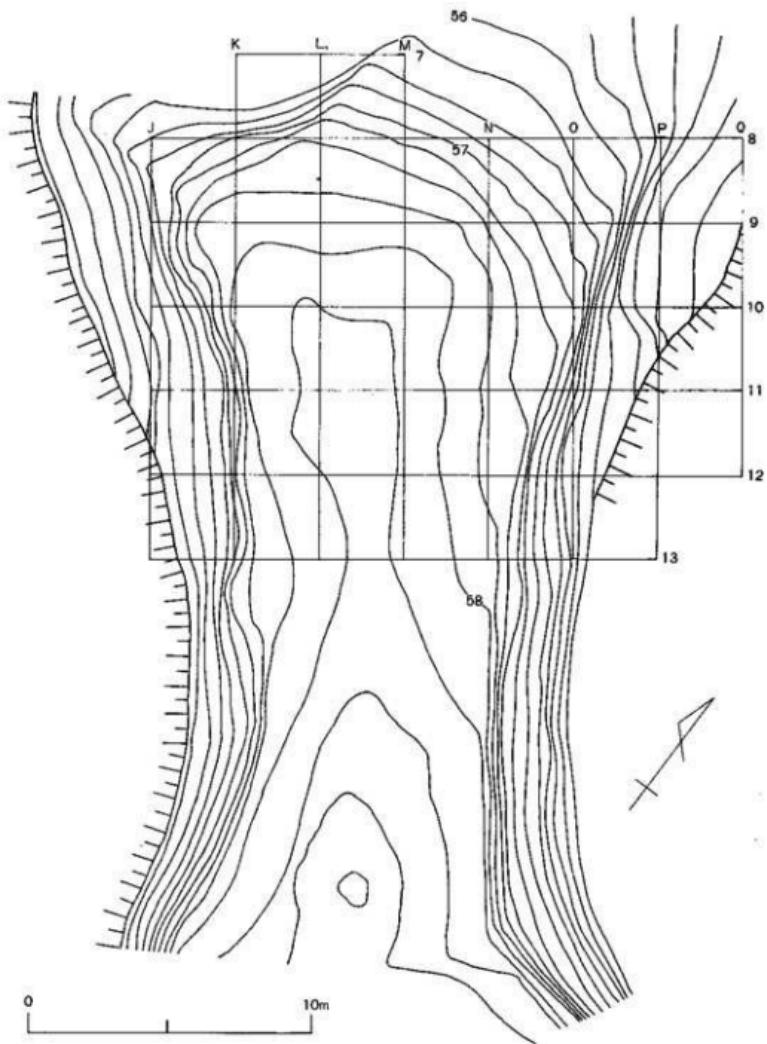


図2 大井谷城西1郭地形測量図（等高線の数字は標高を示す）

判別できる。

この城跡は、南に位置する主郭を中心に東西およそ300mの尾根上に7つの郭を配している。その構成は主郭を中心にして、東に東1郭、東2郭、堀切を挟んで東3郭、西に西1郭、西2郭、西3郭であり、郭の平面形は馬蹄形を呈する。これらの各郭は馬背状の尾根に存在するため、殆んどの郭が細長い方形で規模も大小さまざまである。また、西郭の東斜面や東郭の北斜面等の傾斜が緩い場所には、幅2~3mの帯曲輪が廻らされている。

主郭は丘陵の最南端で標高61mと最も高い位置にあり、規模は10×40mと最大である。郭は平坦であり、表面の観察では土塁などの施設は確認されない。周囲の斜面は削られ全体に台状になっている。なお、南側斜面で頂部より15m下に大井谷横穴群の支群をなすエーゲ横穴群があり、現在4穴が開口している。

西1郭は主郭に隣接する場所にあり、比高は2mを測る。大きさは8×30mの南北に細長い郭で、今回はそのうちの北側半分の調査を行った。調査では、平坦部に石列、建物跡、櫓および路が検出され、およそその構造を知ることができる。

西2郭は、西1郭と西3郭に挟まれた7×20mの小さい郭であり、西1郭に附属する状態にある。さらに、この郭の西側には2mの比高で帯曲輪が4つ並んでいる。

西3郭は、西側尾根の北端に位置し、主郭との比高は10m近くで、かなり低いところにある。郭の規模は10×20mである。この郭の周辺の地形は相当にだらかで防衛上弱く、そのために帯曲輪が東斜面から北斜面に数段廻らされている。

東1郭は、東側の隣接した場所にあり比高は5mを測る。大きさは7×20mと小さいが、主郭と東2郭の中間に位置し、両者を兼ぐ役目をしている。なお、郭の東縁近部に西1郭と同形の長さ15mの石列が直線状に存在する。

東2郭は、10×30mの大きさで主郭に次ぐ規模をなし、東郭の姿になっている。東斜面は急峻であるが、西と北斜面はやや緩やかで、北側には3段に帯曲輪が廻っている。主郭との比高は4mを測る。

東3郭は、東2郭の東方に位置し、幅6m、深さ1m50cmの掘切で隔たれた5×15mの小さい郭である。主郭との比高は12mを測る。

(3) 西1郭の概要

西1郭は主郭の西に2mの段差をもって隣接している。郭の規模は短軸8m、長軸30mの長方形を呈し、このうち発掘調査を実施したのは西側の半分程の240m²である。

検出された遺構としては、平坦部に建物1、石列1、櫓1と東斜面に路1およびそれに櫓1が認められた。これらの中で、平坦部の石列、櫓は遺構の状況より未調査の南側に伸び、一方、東斜

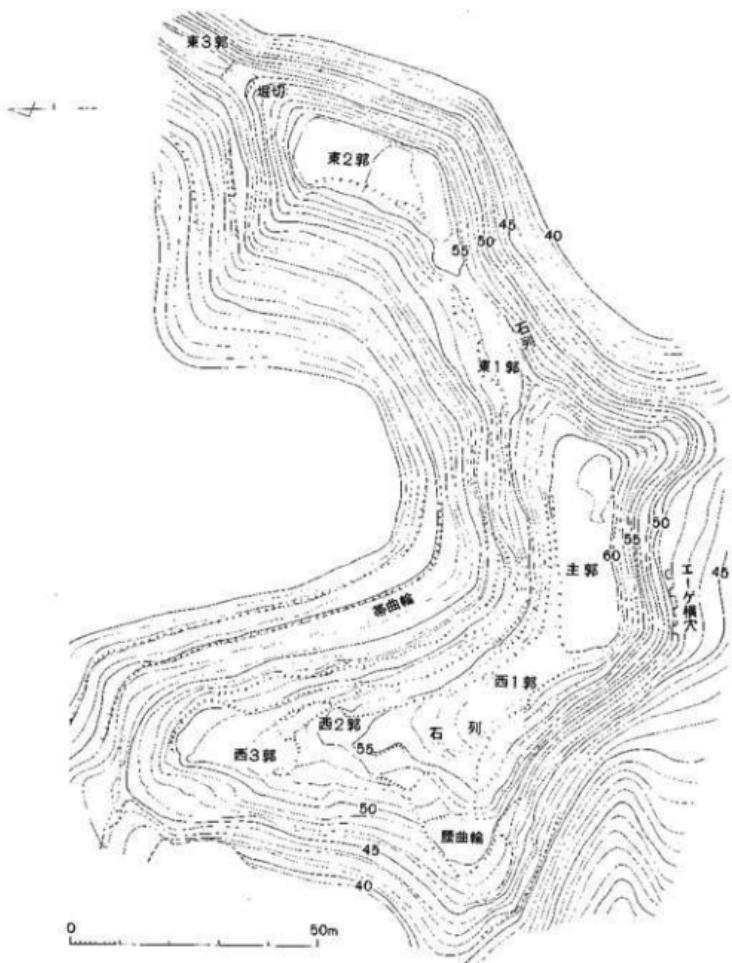


図3 大井谷城跡地形測量図（島根県教育委員会作製）

面の路と柵は北側に続き西2郭に連結すると考えられる。

次に、地山に堆積している土層の観察をしよう。平坦部では土層は20cmほどで、すぐに風化の著しい凝灰岩の岩盤に達する。この部分には遺物はほとんど存在せず、土層の薄さとともに、廃城以降の土砂の流出が大きかったことを示している。一方、東斜面の路付近では地山の断面が「L」字状に加工されていたが、土層が80cmと厚く、表面の観察では確認されない程であった。この付近から遺物、とりわけ土師質土器の細片が発見されているが、それらの多くは平坦部から流出したものと考えられる。なお、路の下方と石列の西斜面は地山が急に落ち堆積層ではなく崖となっている。

(4) 遺構各説

1) 建物跡

平坦面の北端に、郭の縁に沿って横出された4本柱による簡単な構造の掘立造構である。柱穴は、地山を径40~60cm、深さ30~70cmの円ないし方形に掘っている。なお、北側の2穴の深さが浅いのは地山が風化したためであり、穴の底のレベルは他と同じである。規模は東西4m 20cm、南北2m 10cmをはかり、平面プランは2:1の長方形をなしている。

2) 石列

幅50cm~1m、高さ30cmの右列が、平坦部西端から北端に沿って「へ」字状に延べ20m伸びている。石の大きさは人頭大から拳大までさまざまであり、地山削平時に生じたものを利用したと考えられる。この右列の高さは平坦部では水平であるが、北側に折れると徐々に地山と同様斜めになっており、この現状では防衛用の施設の用をなさず、本来はこの右列上に土砂を盛って土壘としていたのではないかと推定される。平坦部の土砂流失の具合から察して、石列上のそれも同様に流れたと考えられる。

3) 第1号柵跡

平坦部の東端に沿って、大きさ40~80cm、深さ40~50cmの穴が約2~3mの間隔で並び、柵列と推定できる。穴は簡単に掘られてはいるが、建物跡の東側の柱穴と一直線になり規則性が認められる。

4) 路

北2郭から1郭へ登る幅約1mの路で、北1郭付近では急に傾斜がつき、東斜面より第1号柵の建物寄りに上ってゆく。柵への取り付け口は地山を難に加工しているが一応階段状になる。

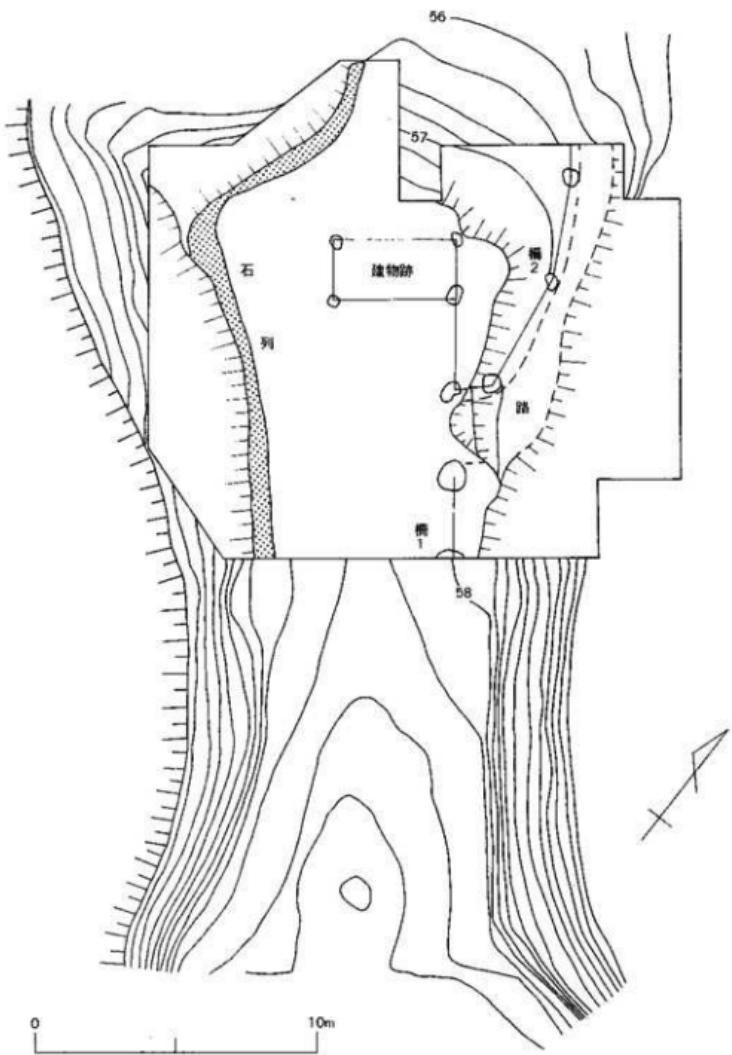


図4 大井谷城西1郭遺構配置図

5) 第2号柵跡

路に沿って設けられた柵で、西2郭から1郭に延びるものである。第1号柵と同様に簡単に掘られ、穴の大きさも80cm前後で深さも同じく浅い。穴の間隔は4m前後である。(西尾)

(5) 遺物

ごく少量である。土師質土器(5図1)は明るい黄土色で丁寧に仕上げられている。

体部の内外に横ナデ痕を有し、底部の切り離し法は磨滅のため不明である。瓦器(5図2)は黒褐色を呈し、内外ともよく研磨されている。この他、須恵器片若干と鉄釘の小片が2片検出されている。(勝部 衛)

(6) 小結

大井谷城跡は先年の分布調査によって初めてその存在が確認されたもので、いまでもなく文献、伝承をもたない無名の山城である。

この城跡の一郭が今回の調査地となり、既に述べた様な成果を得た。また、本城の分布調査および精密な測量図作成は以前に鳥取県教育委員会の手によって行なわれているので、この両調査によって得られた事実をもとに、本城の機能を若干考察して小結とする。

本城は馬蹄形の尾根に位置し、南の主郭を中心に大小7郭とそれに附随する施設で構成されている。郭以外の構造としては常曲輪、腰曲輪、堀切が存在し、多くは東西の尾根先端付近に集中している。それはこの一帯の地形が緩やかで、かつ、尾根が前方へ伸び、敵の進入を受けやすいからであろう。

斜面の様子を観察すると、南側斜面は一様に急峻である。しかし、直下の大井谷から直接に各郭に至ることが可能で、一部の郭では兩側の縁辺部に根石をもつ土壁を設け、防備を行なっている。また、北側斜面は常曲輪数段と橋のみ設け、他の場所と比較すると一見手薄といえる。これは馬蹄形の郭配置をもつ山城の堅固さのためであり、地形が城郭構造を左右していることを如実に示している。

さて、西1郭の遺構としては掘立造構1、土器の基盤を成す石列1、柵をつくる杭列2および西1郭と2郭を結ぶ路1が検出されている。これらは絶て単純な構造のものであり、中世山城の特徴である実戦的な施設だけであった。

最後に本城の遺物とそれにより知られる時期について触れよう。本城に直接関係する遺物としては鉢片、釘および土師質土器が出土しているが、これらは質、量ともきわめて貧弱である。これは遺構の単純さとともに本城の性格を表わしていると考えられる。

本城の時期はおおよそ室町時代と推定される。(西尾)

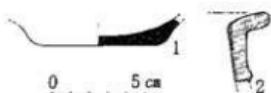


図5 大井谷城跡出土遺物実測図

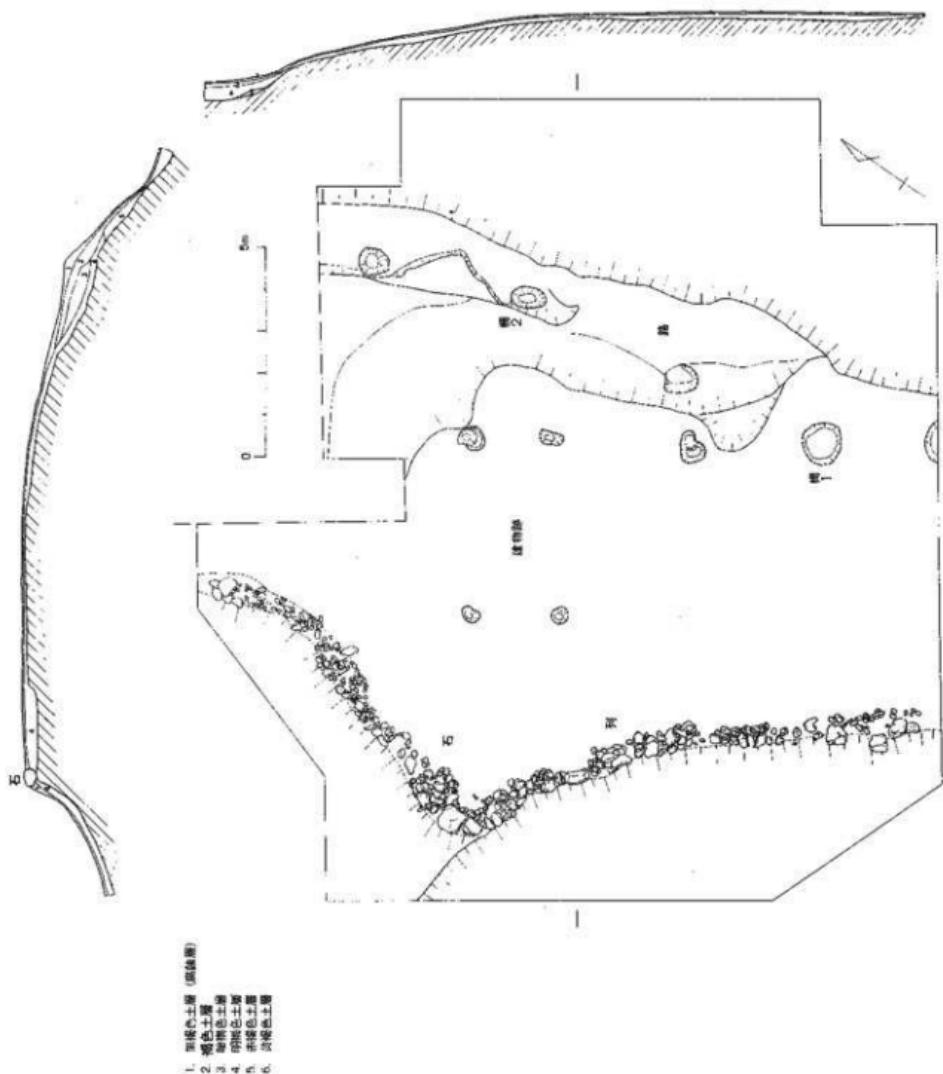


図6 大井谷城西1郭遺構実測図

図版 I 大井谷城跡



大井谷城跡の近景（西より、中央が主郭）



西1郭の建物跡と柵および石列（北から）

III 半分城跡の発掘調査

(1) 半分城跡調査経過

半分城跡は、出雲市上塩冶町に所在し、あわせ発掘を実施した大井谷城跡から直線距離で南西に 500m 離れており、島根県立出雲工業高等学校の裏山に位置している。西方直下には、南の山間部から平野に流下する神戸川を臨み、目をあおげば白砂青松の出雲砂丘が手にとるように望見できる。さらに北方は、北山山塊の陥屈な山肌まで視界を遮るものもなく、東方は斐伊川畔まで展望できる絶佳の地にある。

大井谷城跡の発掘が軌道にのった 11月 14日から大井谷城跡の発掘に半分城跡を並行しておこない 12月 17日に完了した。

以下、日を追って概述する。

11月 14日 (火) 晴れ

発掘作業を開始。手はじめに調査区の表土上の枯木等の除去に取りかかる。

11月 15日 (水) 曇り

調査区内の立木伐採にとりかかる。殆んど伐採は終っていたが、残されていた土壘部分と周辺部を行なう。それにあわせて地形測量を開始する。鉄塔建設用の中心杭を 10M としてグリッドを設定する。

11月 17日 (金) 畏り一時雨

グリッドは $3 \times 3\text{ m}$ に決定したが、 $6 \times 6\text{ m}$ を単位として発掘することにする。はじめに、10L・11L・10M・11M から着手する。

11月 21日 (火) 晴れ

12M グリッドで遺構を確認したが、のちに横穴であることが判明する。10L・11L・10M・11M を掘り下げたところ地山の落ち込みを検出したが、遺構の精査は後日にしておくことにする。

11月 24日 (金) 晴れ

10N・11N・10O・11O の発掘に着手する。掘り下げた結果、傾斜地であるためすぐ地山の凝灰岩が露出する。傾斜は表土のそれとはほぼ同じである。

11月 26日 (日) 晴れ

東に隣接する主郭からの傾斜が水平に変換する 10N・11N で直径 50cm、深さ 1m の円形ピットを検出する。付近にもう 1か所ピット様の落ち込みがある。須恵器片（大甕）が 11K・8N でも数片出土し、円筒埴輪片もあることからみて主郭部に築城以前に占墳があり、築城時に破壊された可能性もある。

12月2日 (土) 曇り時々晴れ

土壘内側に落ち込みを検出し、鉄製品と土師質土器片が出土する。10L・11L・10M・11Mからは小ピット群と上塙を検出する。

この日からセクション図作成にはいる。

12月6日 (水) 晴れ

3日に第2号土塙、5日に第3号土塙を検出し、発掘調査区の遺構の精査をすすめる。

12月8日 (金) 曇り

第4号土塙を検出し、各土塙の調査・実測を継続する。第1号土塙を調査中に、下部に横穴があることが判明し、後日に他の横穴と同様に調査することにする。発掘区全面の清掃を数日実行し、写真撮影をおこなう。

12月9日 (土) 曇り

写真撮影が完了し、遺構の平板測量と発掘区遺構図の作成にとりかかる。あわせて、土塙の構造調査と横穴の発掘に入る。

12月10日 (日) 曇りのち雨

平板測量と発掘区遺構図の作成を継続する。上塙の構造が判明し、セクション図を作成する。1号横穴からは多数の土器出土。

12月11日 (月) 晴れ

1号横穴の前庭部の調査にはいり、少量の遺物を発見する。他は継続。

12月12日 (火) 晴れ

新たに横穴2穴を発見し、あわせて4穴となる。1号横穴の発掘がほぼ完了したが、2・3・4号横穴は調査継続中である。平板測量と遺構全体図がほぼ完了する。一部、横穴の実測にはいる。

12月13日 (水) 曇り

1号横穴の清掃、実測が完了し写真撮影をおこなう。他の横穴内部と前庭部の調査を継続する。

12月14日 (木) 晴れ

横穴群の発掘が完了し、写真撮影を実施する。

12月16日 (土) 曇り

横穴の実測が完了し、半分城跡および半分城跡横穴群の発掘調査の全行程を終了する。

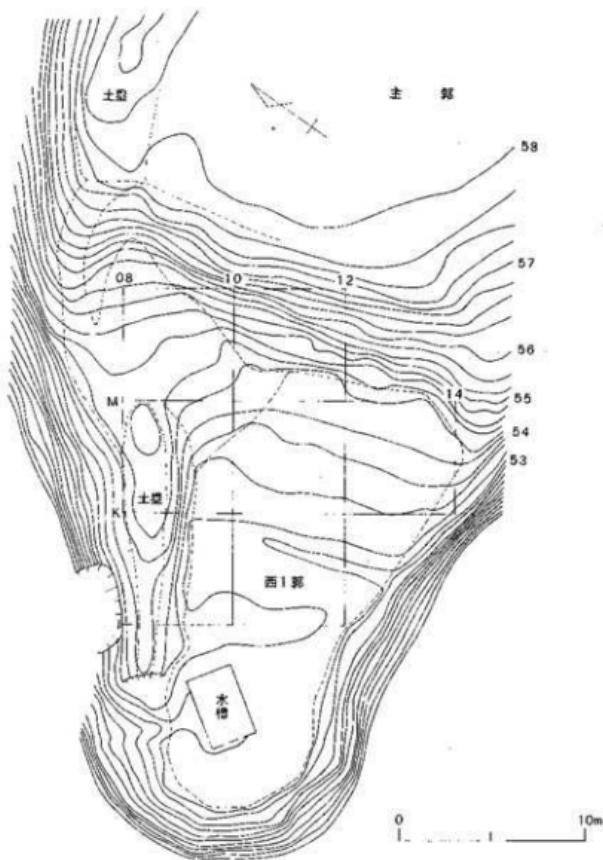


图 7 半分城西 1 郡地形测量图

(2) 半分城の城郭構造

半分城跡は、東から派生した標高60mの丘陵の尾根上にあり、島根県立出雲工業高等学校の裏山に位置する。城郭は、狭隘にして深い谷にかこまれ、いかにも中世の城郭にふさわしい自然の要害を形成している。

半分城跡は、10の郭で構成されている。尾根つづきの東にも6か所の削平地があるが、ここではそれらには触れないことにする。半分城跡を形成する10郭の配置は、主郭を中心として北に北1郭・北2郭、南に南1郭・南2郭、東に東1郭・東2郭・東3郭、西に西1郭・西2郭となっており、主郭から放射状に配置した城郭構造をもっている。これは、大井谷城が馬蹄形の郭配置をなす城郭構造をもつとのとは著しく異なっており、中世の山城としては極めて異色といえる。

10の郭は、大小さまざまであり、主郭が $25 \times 25\text{ m}$ で最も大きく、西2郭が $10 \times 15\text{ m}$ で最も小さい。主郭と西1郭が城郭の中心となっており、それを周囲して帯曲輪があり、北1郭、東1郭、南1郭を結んでいる。

主郭は、1辺が 25 m の方形主郭であり、西1郭からつづく土塁が北縁から東縁部を繋ぎ、南縁の中央部で消失している。土塁は、崩壊が激しく形散化しており、北側で幅4m、高さ50cmを測り、東側土塁は高さがやや高く $70 \sim 80\text{ cm}$ 認められるに過ぎない。西1郭との比高は4mあり、東1郭・南1郭・北1郭との比高は8mで、その斜面は急傾斜である。

西1郭は、発掘調査を実施した郭で、北縁部に主郭からつづく土塁を配備しており、主郭寄りが 20 m で西へ 20 m 突出した三角状の郭である。西1郭から $3 \sim 5\text{ m}$ 低い位置に、南1郭・東1郭・北1郭と、それを繋ぐ帯曲輪がある。

北1郭は、 $12 \times 20\text{ m}$ の南北に長い郭で、ほぼ平坦である。さらにこの北には幅4m、深さ1m50cmの堀切を隔てて $7 \times 25\text{ m}$ の北2郭が配置されており、緩く北に傾斜しているが、郭の西側と東側は急傾斜で谷に落ち込んでいる。

東1郭は、主郭の東に張り出しており、1辺 25 m の正三角形状を呈する郭で、東の尾根つづきには一段高い位置に $8 \times 20\text{ m}$ の東2郭と、その南にひろがり東2郭より 3 m 低い $15 \times 25\text{ m}$ の東3郭がある。

南1郭は、 $15 \times 12\text{ m}$ のやや南に突出した郭である。その北側には幅2m、高さ50cm程度で 10 m 東西にのびる土塁状の高まりがある。

西2郭と南2郭は、他の郭より 5 m 以上低い位置にやや離れて配置され、西2郭は $15 \times 9\text{ m}$ の規模を有する南北に長い郭で、南2郭は 18 m 四方を測る郭で南にのびる尾根を加工してつくられている。

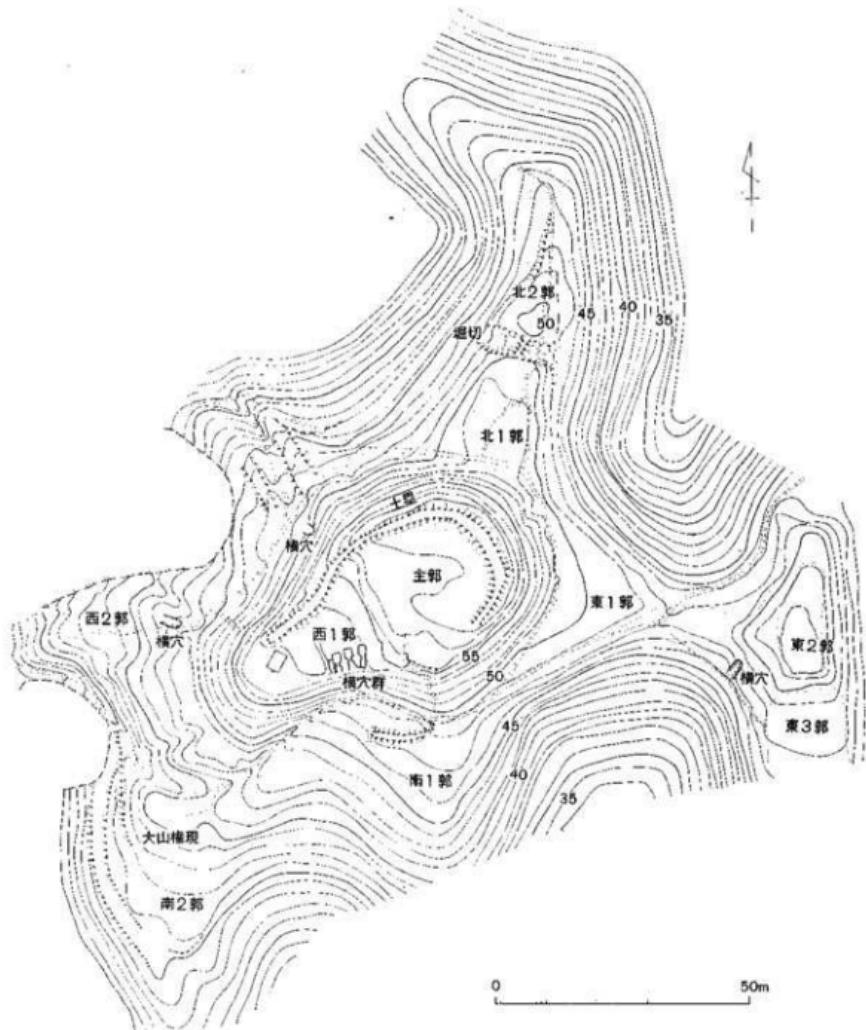


図8 半分城跡地形測量図（島根県教育委員会作製）

(3) 西1郭の概要

西1郭は、主郭の西に隣接し、4m低い位置にひろがっている。郭の規模は、主郭に近いほうが南北20mで三角状に20m西に突出している。このうち、発掘調査は区域外の水槽のある西端部を除いた平坦地のほぼ全域を対象として実施した。

検出した遺構は、土堀と二段の平坦地の二区に大別できる。西1郭の北縁部には、主郭につづく基底幅7m、高さ2m50cmの土壁があり、その内側は平坦地になっている。平坦地は、東と西の二段になっている。主郭寄りの東側平坦地は、幅2m、長さ10m余の南北に細長い平坦地であり、それよりも40cm低い位置にそれの数倍する広さの平坦地が凸端まで広がっている。

平坦地にはピットと土塙が検出され、東側平坦地上の東縁部に、南北にならぶ5個のピットで構成された櫛が設置されている。さらに、その北側の土壁との接点付近には、土壁を抉るようにしてかなり大きな土塙が配置されている。東側平坦地より40cm低い平坦地にうつる段下には、地形にそって幅10~20cm、深さ5~10cmの溝状遺構が掘られており、さらに中央部からは西に向かって1mほどのびている。そのほかに西側平坦地ではピット群と土塙が検出された。ピット群は、その配置が東側に偏っているが、不規則であり、明確に櫛や櫛に断定するまでには至らない。土塙は、第4号土塙をのぞけばその形態が類似しており、適当な間隔で配慮されている。

つぎに、築城時における地形の改変について簡単に触れておきたい。

西1郭は、東からつづく丘陵の鞍部を巧みに利用している。土壁は、原地形を利用して削り残し、その内側を平坦地化しているが、平坦地のすべてが削平されたものではなく、南縁部の相当な部分が造成されている。造成された区域は、山城の下部から発見された4穴の横穴群の羨道・前庭部にあたり、発掘調査区域内だけでも50帖にもなる。それらの区域は、いわゆる版築によって掘きかためられており、深いところで2mにも及んでいる。

このように、削った土を平坦地の拡張にうまく利用して、原地形ではおよそ平坦地の存在しないところに主郭のつぎに規模の大きな郭を配置していることは、中世の山城としての半分城跡における西1郭のもつ重要性がいかに高いかを示唆するものであろう。

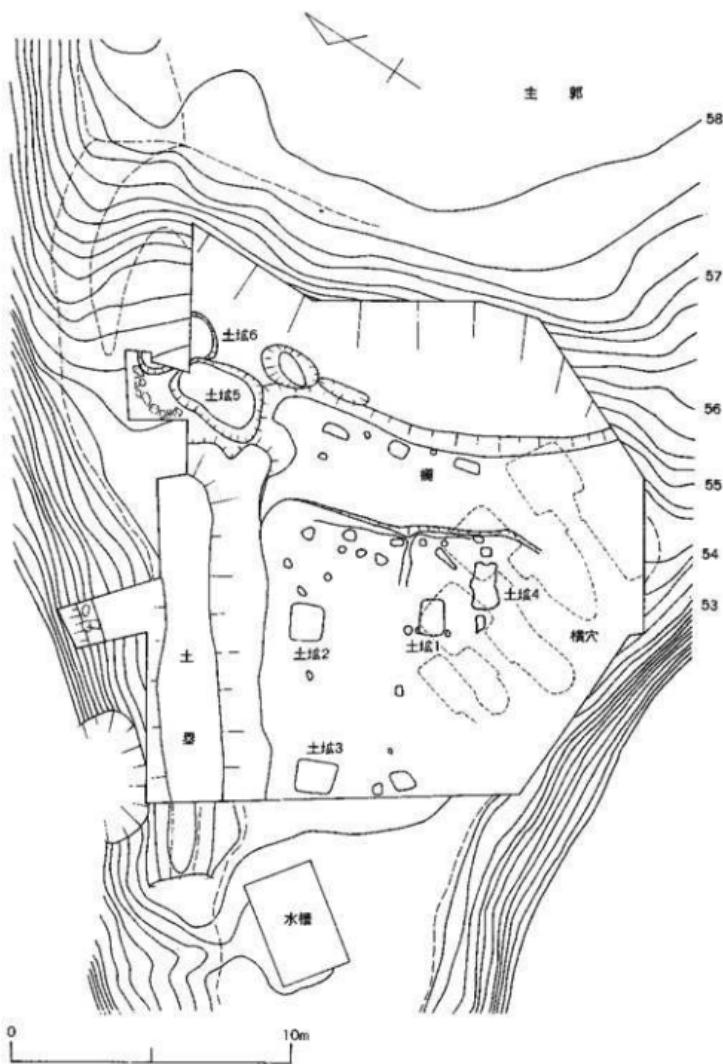


図9 半分城西I郭遺構配置図

(4) 遺構各説

1) 第1号土塙

西1郭の郭内にある6個の土塙の一つで、半坦部の中央に並ぶ3個の土塙の真中に位置する。土塙のプランは長方形であり、規模は一边が $1m \times 1m 50cm$ で、深さは1mである。加工状況は、壁面が岩盤で硬いにもかかわらず丁寧に削られ良好である。また、土塙内には石が多く認められ、底面付近では壁に沿って人頭大の河原石・野石が数個、底面中央部では拳大の河原石が10数個まとめて存在した。遺物としては、多量の炭化物に混って土師質土器一個体分、鉄釘片4本が塙底付近より出土している。なお、壁面は南斜面より穿たれた3号横穴の玄室奥部の天井と接し、大きな穴が開いた状態になっている。

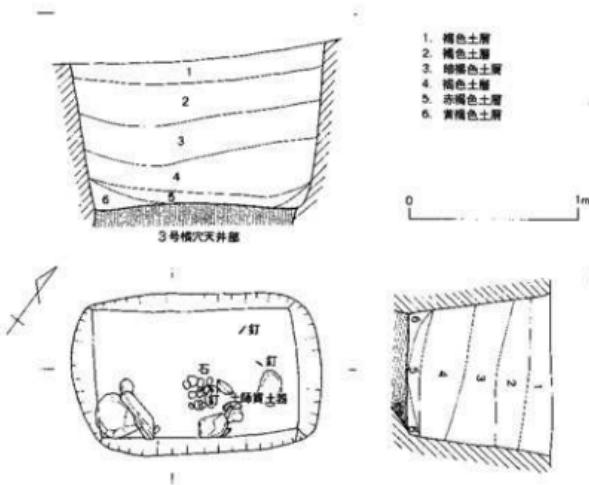


図10 第1号土塙実測図

2) 第2号土塙

第1号土塙から $3m 50cm$ ほど北にあり、上縁から $80cm$ 離れている。これはほぼ $1m 20cm$ の方形プランを呈しているが、やや東西が長い。壁面は鈍麗に削り整形されており、垂直に近い角度で立ちあがる。塙底までの深さは土塙中央部で $80cm$ あるが、塙底周縁の壁下には周溝が続

っている。北側だけは確認していないが、おそらく四周を繞っていたものと思われる。西側と東側の周溝は幅 10 cm、深さ 5 ~ 10 cm であり、南側周溝においては幅 7 cm、深さは 15 cm 以上ある。

土塙内からは、鉄製品数点、土師質土器片、炭化物が出土した。

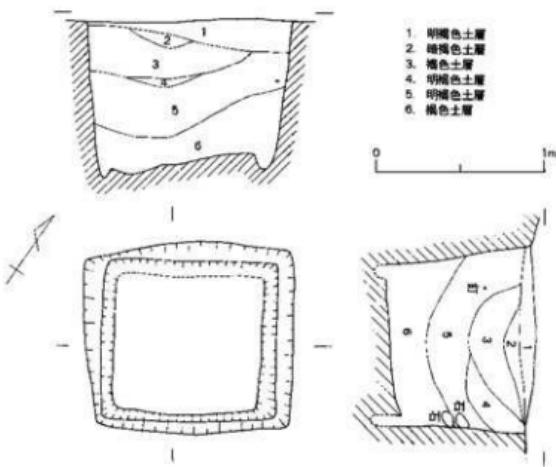


図 11 第 2 号土塙実測図

3) 第 3 号土塙

発掘調査区の西端に検出され、第 2 号土塙から 4 m 西にあり、土塙からは 1 m 離れている。土塙の形態は、1 m 20 cm の方形を呈し、壁面は第 1・2 号土塙と同じく綺麗に削られている。土塙肩部から 30 cm の深さで、さまざまな大きさの自然石 10 数個が不規則にならんでいた。土塙の底は、さらに 70 cm 以上と深い。

塙内からは、土師質土器片少量と鉄製品が出土し、礫群の直上では炭化物をかなり検出した。なお都合により礫群の下方は積立をしていない。

4) 第 4 号土塙

第 1 号土塙のやや東に近接して存在する土塙で、東西 1 m 60 cm、南北 1 m の不整長方形プランを呈する。深さは 30 ~ 50 cm で、第 1・2・3 号土塙と比べると著しく浅く、それらとは性格を異にするように思われる。

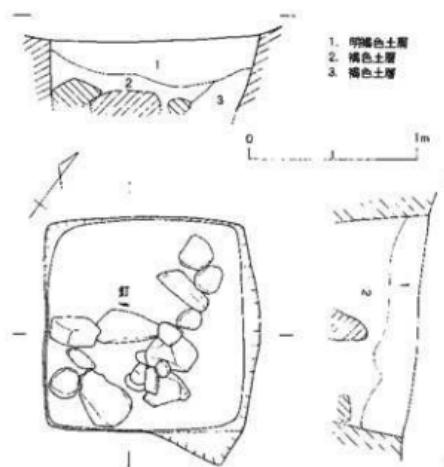


図1-2 第3号土塙

七塙の中には、鉄製品・炭化物・大石・土師質土器が検出され、この点では、他の土塙と何ら変わることはないが、鉄釘のはかに、鐵鎌とおもわれる鉄製品が土塙最東端部から出土したこと特に特色がある。

5) 第5号土塙

発掘調査区の北側の土塙のすぐ脇にあり、主郭の西1郭への斜面下に位置している。発掘調査区内で検出された土塙では規模が最も大きく、南北3m40cm、東西が中央部で2mの横円プランを呈する。深さは60~80cmで北にむかうほど浅くなり、上塙やや北寄りで段差がある。

土塙は上塙の一角を抉るようにして掘られており、拡内からは多量の土師質土器、鉄製品、炭化物が一様に出土し、また、上塙のレベルと塙底には多くの人頭大の自然石が不規則に埋まっていた。

土塙のすぐ北の土塙上には自然石数個が曲線状にならんでおり、土塙と土塙との関係を知るうえで参考になる。

6) 第6号土塙

第5号土塙の北に隣接しており、切合関係からみて、第5号土塙よりも古い時期のものである。

時間的制約のために完掘できず、全容を明らかにし得なかったが、上塙肩部のカーブからみて第5号土塙ぐらいの大きさと思われる。

塙内からは、土師質土器、鉄器、炭化物が出土した。土師質土器の中には完形土器が1点含まれているが、他は第5号土塙と同じく破片が殆んどである。鉄製品も数点出土し、炭化物も多く、遺物の点で第5号土塙と極めて類似しているが、自然石を殆んど混入していない点だけは唯一の相違点である。

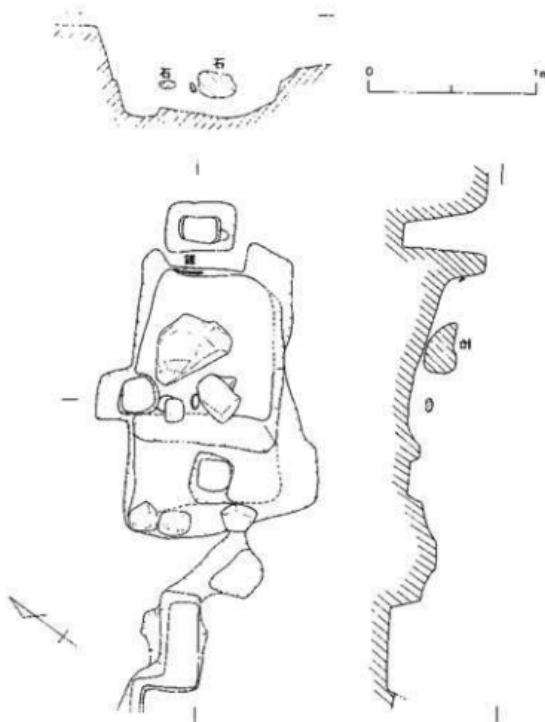


図13 第4号土塙

7) 第1号柵跡

主郭からの斜面下の段下に南北にならぶ5個のピットで構成されている。西1郭では最も東側に位置しており、幅2mで南北が10mの平坦地上にある。

5個のピットは大小2種類あり、P16、P18、P20が比較的大きく、P17とP19は小さい。大小のピットは交互にならんでいる。大ピットの間隔は2m40cmで、その間に補助的役割をもつ小ピットがあり、P18を中心としてシンメトリーのピット配置となっている。

P18は径60cm、深さ80cmで、5個のピットの中央に位置し、これらのピットのうちでは最も大きい。P18の両隣に位置するP17とP19は径20cm、深さ10cmでいずれも小ピットである。P16とP20は形態が似ており、南北に細長いピットである。P16は南北1m、東西40cm、深さ50cmをはかり、P20は南北80cm、東西50cm、深さ40cmでP16よりやや小さい。遺物は少なく、土師質土器片が出上しているに過ぎない。

8) ピット群

第1号柵跡のある南北に細長い削平地よりも40cm低い下段の平坦地にある。

ピットはおもに七星内平坦地の東側に偏っており、全部で20数個を数える。これらのピットは、概ね径30cm以内の小さいものが多く、形態は円形が殆んどであるが、P2とP4は方形ピットである。P2とP4は何らかの繋がりを認めることができるが、これらと関係がありそうなピットは見当らない。また、これらを含めてピット間で確実に関連がありそうなものは認めることができないようであるが、可能性があるとすれば段差のある部分に沿った柵であろうか。

9) 土 壘

山城の防禦に欠かせないものの1つに土壘がある。西1郭においては、発掘前に既にその存在は分布調査で判明しており、発掘時にも一目瞭然であり、その延長は東側に隣合わせの主郭にまで達するものである。

地表面での観察からは、西1郭の西端にある水槽の北から北東方向に走り、外側にゆるくカーブしてそのまま主郭の北隅を繞り、地形に沿って南に向きをかえ、主郭の南縁中央で消失している。端的にいえば、西1郭の半分と主郭の西1郭との接面を除いた縁辺の殆んどが土壘に囲繞されていることになる。しかし、発掘調査の結果、後述するように、西1郭の残る半分の南縁部においても土壘が続っていた可能性が指摘できる。

西1郭が山城構築の際に殆んど平坦面のない尾根を削り、さらに南側を丁寧に掘き固め平坦地を確保していることは先に触れたが、発掘調査において南縁部から遺構が荷目検出されず、遺物の出土も殆んどなかったことやその地点の土質が凝灰岩の細粒ブロックを多く含みかなり繋まっ

ており、かつ、その上面が郭の中央部よりもレベルが若干高いことからみて、北縁部を繞る土塁はどの規模はないにしても本来は小土塁が存在し、土塁本体の殆んどは崩壊して流亡し、基底部のみを残しているものと推察されるが積極的に断定するまでには至らない。

南縁部の土塁構築の可能性は推測の域をでないので暫くおいて、確實に存在する北縁部の土塁についてのみ触れたい。

土塁は、西1郭・主郭をあわせると総延長は70mを測り、西1郭のみでは20mである。土塁の全面を調査することはできなかったが、土塁の構造は、これに直交する幅2mのトレンチを設定し、それによって概要はつかむことができた。

土塁は、地表面からの観察では盛土と推定していたが、発掘調査によって地山を整形加工して削り残したものであることが判明した。これもさきに触れたように、築城時において平坦地がなかったためその有効な土地利用の所産であろうし、さらには地山であるクサレ礫層は聞く締った土層で層中にクサレ礫を多量に含み、土塁の構造的強じん性からみても申し分ないことも利点であったであろう。

土塁の断面をみると、基底部幅が6mで土塁の高さは外側の下底から2m50cmをはかる。断面はやや蒲鉾状であるが、郭にむいた土塁内側がやや傾斜が急であり、基底部の高さを比べてみると、外側よりも内側のはうが90cm高い位置にある。

さらに指摘しておかねばならないことは、土塁外側据部の構造についてである。土塁本体が地山の整形加工によって削り残されたものであることは既に述べたが、厳密にいえば、土塁断面図をみればすぐわかるように、外側据部の深さ1m、奥行1mほどの区域に5~20cmの薄層を数層かさねており、さらにその下底付近には石が置かれている。これは土塁の崩壊を防ぐにはあまり意味をなさないので、一部しか調査していないのでピットは発見できなかったが、むしろ、土塁前面据部の1m幅が柵列の設置に利用され、いわゆる版築によってその根固めをしたと考えるほうが適切らしいのではなかろうか。(川上)

(5) 遺物

遺物には、土器類、石製品、鉄製品がある。以下製品ごとに分けて記述する。

1) 土器類

上器類には土師質土器、陶磁器がある。このうち土師質土器が大部分を占め、他はごくわずかな量にすぎない。

土師質土器 小片になったものが多いが、調査区のほぼ全境から出土している。全体の形をうかがえる保存良好な資料は落ち込みあるいは上塗など、構造とともにあって出土する。図示した七器の出土箇所は次の通りである。8O、8N、9Nにまたがる上塗5下層出土の土器が9例(図14-1、4、

9、11～16）、にライン下唇1例（2）、12M上唇内1例（3）、1号横穴内3例（5、6、8）、第3上唇内1例（7）、11L上唇内1例（10）である。1号横穴内からの出土は遺構の項で説明したように、城を構築する際、古墳時代横穴の天井部を削り取っているため、土器が落ち込んだものと考えられる。

出土状況や土器形態の検討から、これらの土師質土器群はほぼ同一時期の所産と考えられ、I～Ⅲ類に分類できる。（図15参照）。

各類に共通する点として次のことがあげられる。すなわち、体部の内外にロクロナデが認められ、底部の切り離しには糸切手法が用いられている。また大部分が明るい黄土色を呈し、緻密な胎土中に微細な砂粒をわずかに混入する。

固化できなかったものも含めて、量的にはⅡ類が最も多く、ぐんと下がってⅠ類、Ⅲ類はごくわずかである。

Ⅰ類（図14-1～5） 口径6.8～8.3cm、高さ1.5～2.0cm。底部は共通して上げ底を示す。（2）～（5）は難な仕上げが目立ち、底部内面には渦巻状に凹凸を残す。器壁の厚さも一定でない。（1）は器壁も薄く、ていねいに仕上げている。（2）の内面は例外的に黒褐色を呈す。

Ⅱ類（図14-6～9） 口径11.6～14.4cm、高さ3.0～4.4cm。（6）と（8）がていねいな作りで体部がほぼ直線的に開くのに対し、（7）と（8）はやや難で体部はわずかに内湾する。（10）を除き半底である。

Ⅲ類（図14-10） 口径15.6cm、高さ5.4cm。体部はわずかに内湾し、底部はほぼ半底である。

以上、Ⅰ類からⅢ類までその概要を述べた。ここで注意されることは、出土する土器がすべて供物形態であり、煮沸形態である鋏釜類のないこと、器形にかかわりなく、ロクロによる成形と回転糸切り手法による底部の切り離しをしていること、さらに同じ器種にあっても作りに精粗の別があることである。

ここで土師質土器の時期について触れる。県内の土師質土器の形式編年はこれからという段階にあり、いきおい、年代考定の進んでいる陶磁器との関係、および出土層位に頼らざるを得ない。土師質土器の出土状況は前述したように遺構とともに多く、下層から出土している。一方陶磁器は後述するように、土器構成上内出土の備前焼スリ鉢（図14-18）を除いて、上層から出土している。上層出土グループは江戸初頭、備前焼スリ鉢はその形態から15世紀後半～16世紀前葉に位置づけられる。以上の状況から土師質土器の年代は江戸時代初頭以前に属し、15世紀後半～16世紀前葉を上限とする時期、すなわち室町時代後半～安土・桃山期に比定できると考えられる。

陶器は破片にして10数片ある。1片の大きさも小さく、調査区の中央やや南寄りから北東側にかけてバラバラに出上し、全形をうかがわせるようなものは全くない。また、土師質土器を含む

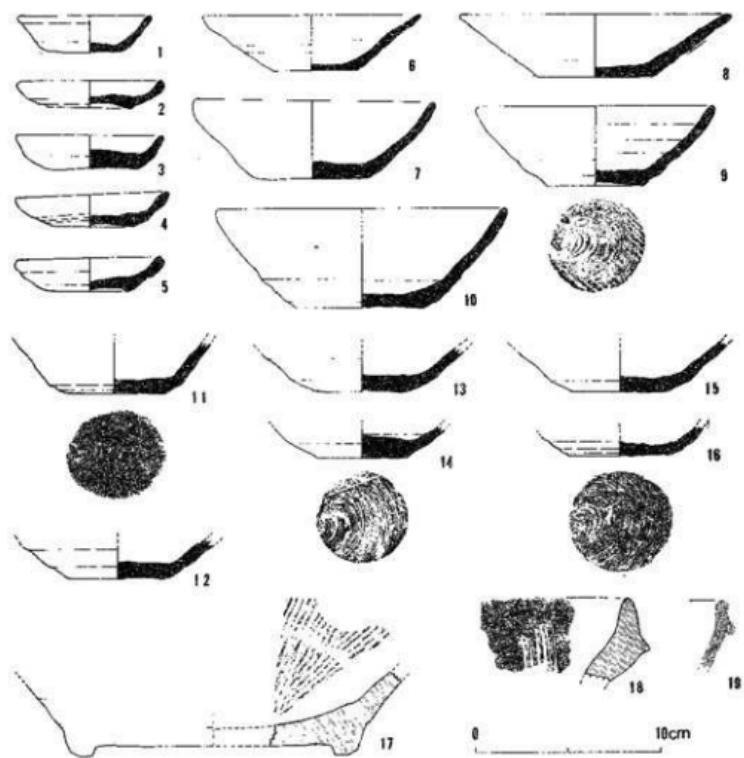


図1-4 半分城跡出土・土師質土器、陶器実測図

層よりもさらに上層で検出されることがほとんどであることなどから、土師質土器に比べて造構との結びつきが薄い点が注意される。

陶磁器 図示可能のものは、14図の3点である。いずれもすり鉢と考えられる。(17)は12Lの表土層上上で、唐津系である。(18)は9N地区土堤内赤褐色上層から出土している備前焼である。灰白色を呈し内面にタシ状工具による6本の条溝をもつ。(19)は鉄軸の施された口縁部で、唐津系である。BO落ち込み中層から出土している。

磁器は小片であるが1片出土している。有田焼と考えられ、外表面に染付けを施す。これら陶磁器の年代は(17)、(19)および磁器が江戸初頭と考えられ、(18)は15世紀後半～16世紀前半に比定できる(註1)。

この他、備前焼大甕の破片約10片、須恵器の大型品の破片が出土地で出土している。

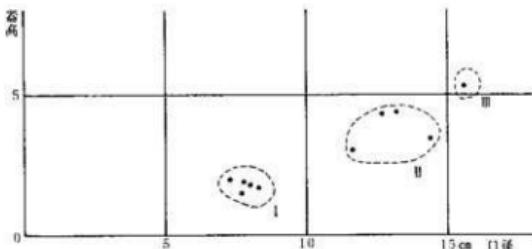


図15 半分城跡出土土師質土器法量図

2) 石製品

石臼の下部の破片が1片出土している。石材は凝灰岩質で、復元径は約27cmを測る。

3) 鉄製品

鉄製品は20数点出土しており、大部分を鉄釘が占める。土塙、落ち込み等の遺構にともない、土師質土器と同一上層に混在して検出された。

鉄釘（図17-1～15）先端が折れ、鋸歯化が著しく、完形のものは少ない。現存長2.9cm～8.0cmの角釘で、いく種類かに分別できる。頭部の形態は、くの字に折り曲げられたもの（1、12）と锐角に曲げられたものの2種類がある。

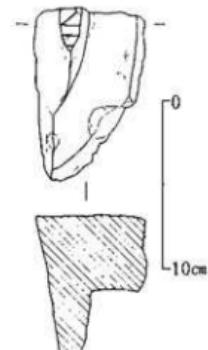


図16 石製品実測図

鉄鎌 第5土塙内出土。先端が欠失しており現存長は21.1cm、幅さ5mmを測る。ゆるやかなカーブを描いて湾曲し、基部を折り曲げている。この特徴ある基部をもつ鎌が、奈良県御所市稻荷所在の近世墓（註2）から出土しており、時期決定には参考になろう。

用途不明鉄器 一端に円形の環をもち、他と連結した状態を示すもの（16）、板状のもの（17）など各種バラエティに富む。（勝部 翔）

註1. 陶磁器類に関しては島根県立博物館村上 勇氏にご教示を得た。

註2. 横原考古学研究所編「奈良県文化財調査報告書」29集、昭和51年3月。

（6）小 結

半分城跡のうちで、発掘によって遺構を明らかにできたのは西1郭のみである。よって、この成果だけで城跡全体の様子を把握することは不可能であるが、立地や郭の配置を考慮して本城のもつ機能について若干触れてみたい。

本城は西方面下に山間から平野部に流れ出す神戸川を臨み、はるか西方の砂丘地帯から東は斐伊川まで望見できる軍事上の最適地を選地している。さらに、この丘陵は標高60mの低丘陵に

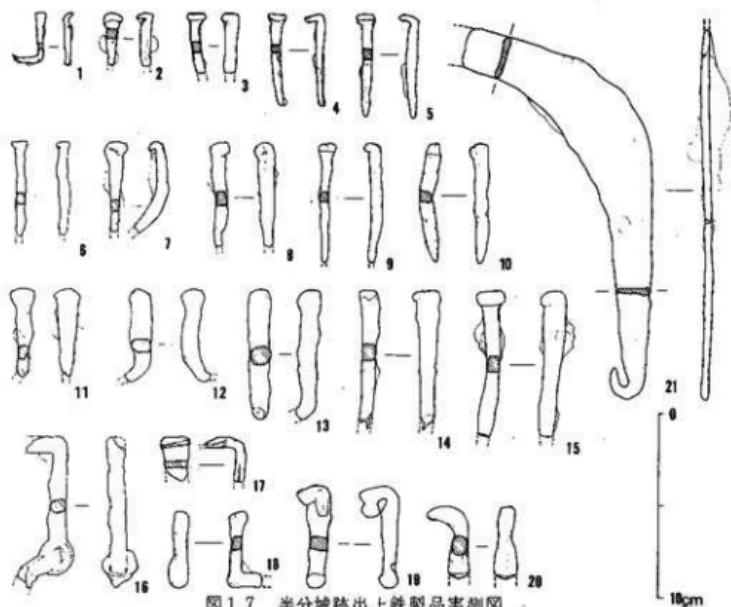


図17 半分城跡出土上鉄製品実測図

も拘らず谷は深く、天然の要害を形成し、城郭を築くには全くの好適地といつてよい。大井谷城に比べて規模も大きく、本格的な山城の形態を備えている。

しかし、本城が大井谷城跡と異なり、放射状に郭の配微をなす城郭構造をもつことは、尾根沿いに敵が進入し易いということの裏付けになる。大井谷城跡が二筋の尾根に郭を連続して配し、土壁は外側に向う部分にのみ設けて、一見単純で攻め易くみえるが実際は相当に堅固な城である。一方半分城は深い谷があるとはいえ、尾根が主郭を中心として放射状に幾筋にも伸び、また、郭が分散し、主郭と西1郭の周縁を回繞する土壁に示されるように、一見堅固にみえるが敵に攻められると案外脆弱さを露呈しかねない。

発掘により西1郭は土塁、櫓を設け、内側平坦地に上塙を配した郭であることが判明した。各上塙の塙内には鉄製品・炭化物・石・土師質土器を包含するという共通点が窺われ、特に第1、2、3号上塙は形態が相似し、何らかの機能を有したと思われるが、その性格は解明できない。

とにかく、半分城において、上地を造成してまで平坦地を確保しようとした西1郭の果たす役割は、かなり重要であったと思われる。

将来、主郭が発掘調査されたとき、それらの意味がはっきりと理解され、半分城の全容が解明されることを期待したい。

なお、本城の時期は遺物より推して、室町時代後半～安土・桃山時代に比定される。（川上）

1. 黑褐色土層
2. 棕褐色土層
3. 棕色土層
4. 棕色土層
5. 棕色土層
6. 明褐色土層
7. 淡褐色土層
8. 棕色土層
9. 棕褐色土層
10. 棕色土層
11. 明褐色土層
12. 黑褐色土層
13. 棕色土層
14. 赤褐色土層
15. 棕色土層
16. 黄褐色土層
17. 绿褐色土層

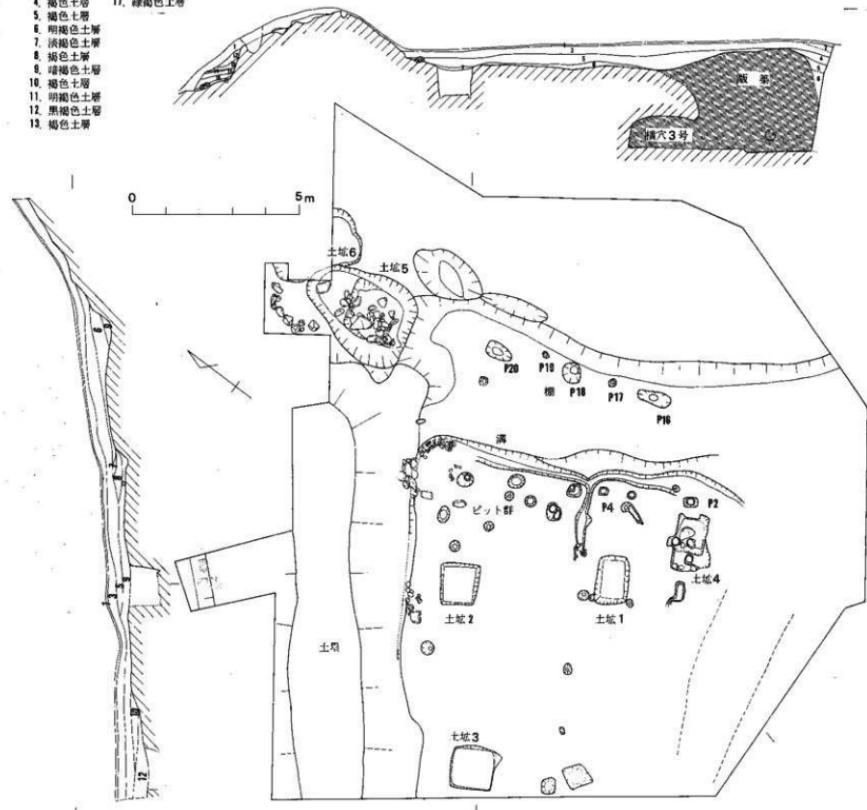


图18 半分城西1号墓遺構実測図



半分城跡の近景（西より、左側出雲工業高校）



発掘前の状況（西一郭の土壘付近、前方は主郭）



発掘風景（半分城西1郭）

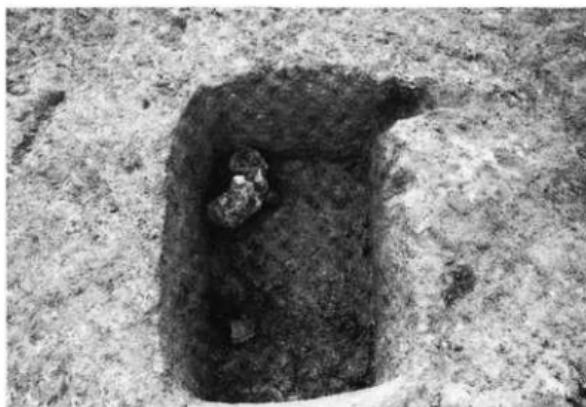


主郭より望む西1郭の遺構（東より）

図版IV 半分城跡(3)



西1 郭の柵跡
(北から)

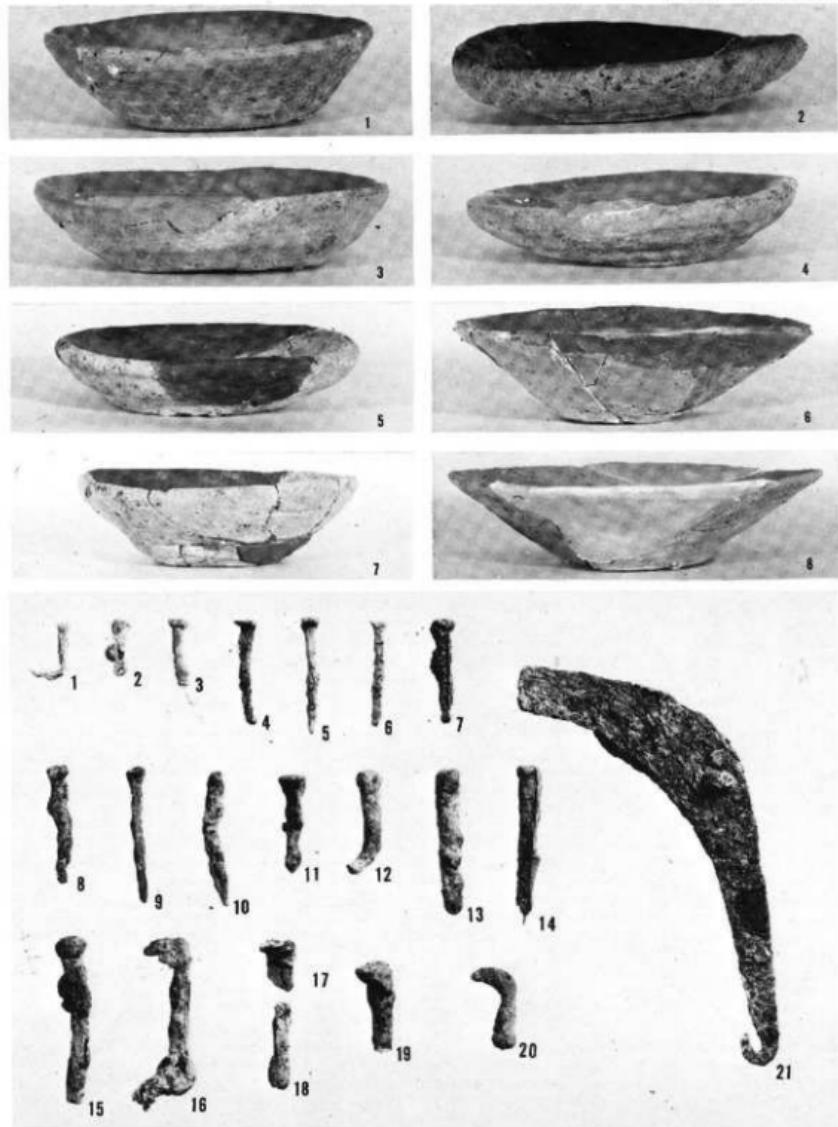


土塹1 (東から)



土塹5 (北から)

図版 V 半分城跡(4)



西1郭出土の土師質土器と鉄器

IV 調査に関連して

(1) 「塙治」を名乗った武将たち

今回発掘調査された二ヶ所の城跡（出雲市上塙治町字大井谷、同町字半分）は、いずれも塙治氏にかかわるので塙治を称した武将たちについて述べてみたい。

1) 塙治大夫

源平盛衰記「一の谷城構事」の文中に次のとく塙治大夫がみえる。

「……平家何戸の人々出雲国には塙治大夫、多久七郎、朝山記次……」この塙治大夫は平家方であるから、次に述べる塙治氏との関係はないが、塙治郷内の古城として知られている平家丸、大廻城、要害山、半分城との関係も、郷内の事蹟も全く不明である。また朝山氏の祖が塙治平五郎と名乗っていた事もあるらしい。

2) 佐々木塙治氏

出雲國守護職は、近江源氏の佐々木氏からであることは周知のとおりだが、5代の守護に任せられた佐々木頼泰は、弘安（1280）の初め頃に塙治に下向し大廻城を構えて塙治氏を名乗った。北島家の「出雲佐々木古志系図」に次のように記載されている。

頼泰 兵庫頭 出雲国惣領

また、佐々木二十三家といわれるほど佐々木一族は塙治氏、富田氏、湯氏、古志氏など国内一円に勢力を持っていた。

守護職としての塙治氏は、鎌倉から室町期にかけて頼泰、貞清、高貞と三代続くのだが、貞清や高貞は隠岐國守護も兼ねている。

勝済寺に三重の宝塔を建立したり、出雲国造家に娘を嫁がせるなどして、在國古来の勢力と協調しながら国内を統治していたと思われる。この塙治氏三代の城はどこだったか。今回の調査は専門調査員による初めての発掘調査であったが、調査面積が少なかった事やきめ手になるような遺物も発見されず、塙治氏との関係を明らかにすることはできなかった。

しかし地元塙治では、一の谷西端の大廻城が塙治氏三代の居城であったと伝えている。

南北朝時代の日本史にも登場する塙治判官高貞は延応4年（1341）宍道町白石の山中で自殺した悲劇の武将だが、この高貞を弔うために、大廻城の山麓に高貞の法名をとり「頓覺寺」が建立された。（塙治旧記）

塙治氏三代の事蹟は比較的多く、一般にも知られているので紙面の都合もあり省略する。



図1.9 出雲佐々木（塙治）氏略系図

3) 後塙治氏

塩冶高貞が山名時氏らに追われ自殺したので、足利尊氏は佐々木京極高氏を出雲守護職に補任した。高氏は同族の吉出徹覺を守護代として富田城に派遣したので、国内の政治の中心は塩冶から富田（広瀬町）に移った。だが塩冶氏は尚貞で絶えたわけではない。尊卑分派は高貞の子に尚貞をあげている。

大平記は、高貞の子は播磨の陰山（現姫路市豊富町）で母西台の局とともに山名氏らの追手につかまり焼死したと凄惨に記述しているが、冬貞は塩冶郷に生れ育った高貞の正妻の子と思う。冬貞在郷の事蹟はわからないが、足利直冬の家人となって高貞後の勢力を維持しようとしていたらしい。南北朝、1340年代の勢力分布図（『日本の歴史』小学館）には出雲国一円は塩冶冬貞になっている。また大社富家文書目録（宝暦13年）に「応平17年 冬貞 判」とあるがその内容がわからない。

正平7年（1352）山名時氏は雲隠二國を実力で奪い官軍に降った。山名氏は以降約40年間出雲を領有するが、時氏の孫満幸は元中元年（1384）出雲守護となり、塩冶師高（幾河守）を目代として富田城に置いた。塩冶師高的父は上郷五郎入道（出雲私史）であり、塩冶高貞につながる上之郷（出雲市上島町）の城主であったらしい。

山名氏は明徳の乱（1391）に敗れ、足利義満は京極高詮を塞謫の守護とした。塙治高は富田城内で自殺し、父上郷入道は旧臣ある京極氏に降った。（明徳記）

明徳4年京極氏に味方していた三刀屋氏は、山名氏の残党塙治遠江入道父子らが三刀屋城を攻撃したのでこれを撃退したと次のように京極高詮に報告し高詮もこれを認めている。（三刀屋文書）

須和部菊松丸申軍忠事

右山名播州並塙治遠江入道父子有謀判企
而去二月五日率大勢押寄三刀屋城之間致
散々合戦 一族若党等數章雖被拵御敵等
追払之舉 次於古志高岸 同三月七日即
合戰懸前一類無残所負手軍忠度々…以下略…
明徳四年三月廿一日

承了 花押（京極高詮）

塙治遠江入道とは塙治高貞の弟時綱の長子義綱である。

奉寄進 伴兼大社

出雲國神門郡塙治郷内田地壱町
右為天下泰平家内繁榮以件田地所令奉寄
当社也……以下略……
貞治參半五月十日

遠江守源朝臣義綱 花押

次の寄進状の貞綱は、上記時綱の弟宗貞から数えて五代豈高（兵部大輔三河守）の長子である。

奉寄進 神東八幡宮御神出事

合五段者神東村内坪付在別席之
右任文明九年十一月貞綱寄進状之旨為
御修理印 永代寄所寄進也 然間貞綱武
運長久所願成就祈念不可有急転 仍寄進
狀如件

長享元年毛 - 月十五日

参河守源貞綱 花押

上記は県史から転記したが、神東村とは塙治村のこと、貞綱は「武運長久」を塙治八幡宮に祈念している。長享元年（1487）は、尼子経久が守護代塙治郷介を殺し常田月山城を奪回した（陰徳大平記）翌年であり、戦国時代の幕明けである。

以上は資料の一部であるが、後塩治氏のうち、高貞の直系は冬貞のとき塩治郷から離れたと思われるが、高貞の弟宗貞らの系統は、下塩治に館を構え菩提寺淨音寺を再建し、山名氏に味方し守護京極氏や尼子氏と戦うほどの勢力を保持していた。

これら後塩治氏も上塩治の城に據っていたと思われるが、史証は見つかっていない。

4) 塩治興久

京極高詮は明徳3年（1392）頃出雲守護に補任されたらしいが、その後同族の尼子持久を守護代とした。持久は富田月山城を尼城とし清定、経久と相続する間に、国内の山名氏の残党や地頭らを従えた。経久はついに雲陽11ヶ国を支配するほどの大守となった。この経久の三男が興久である。

経久が興久を塩治に派遣したことを、「雲陽軍実紀」は次のように記している。

「國亂を押へん為に三男宮内少輔興久をば三千貫を玉はり、塩治之古城に遣し、龜井能登守が弟新二郎利綱、米原小平内、今岡弥五郎を執権にぞ添置れる」。

その頃、尼子氏にとって西方の脅威は山口の大内氏だったので、大内氏に対する守りと杵築大社、鶴鹿寺また朝山氏や佐々木塩治氏など在郷勢力を牽制する目的であった。

興久は永正15年（1518）頃塩治に来て、塩治領秦らが築いた古城を修復したと思われる。

奉寄進 塩治郷内高岡村之内御崎御神田之事

右田地壱町造宮田為祈念所寄進申也

於子々孫々殊ニ不可有相應状如件

永正十五年十二月一日

塩治彦四郎興久 花押

御崎検校 鍛

この外に、宝暦14年塩治八幡宮萬指出帳によれば、大永初頭に炎上した塩治神社を、塩治宮内少輔興久が再建している。また古江の成相寺・願安堵塔（永禄9年）などがある。

興久は、父経久から給された三下貫では尼子の外様地頭にも劣ると加増を訴えたので、経久は志蘇郡（庄原市）内で一千貫を与えることにした。しかし興久は意に満たずついに経久らと争うことになり、佐蛇、末次あたりで激戦した。天文元年（1532）八月のことである。

完敗した興久は妻の生地である備後甲山・山内直通に逃れたが、経久の知るところとなり自殺した。38才であったという。

興久が塩治に居た期間は約15年、塩治城はまた城主を失った。

興久がいま上塩治地内にある3ヶ所の城跡のうちどれを主城としていたか、そして館をどこに構いたか不明である。地元では若沢の要害山城だと言われているが、富田月山城に成人した興久

にしてみれば、塙治の城跡は貧弱であったに違いない。とすればもっと奥地の高所に城を構えようとしていたと思う。

塙治開久の死後、塙治氏を名乗った武将は定かでないが、尼子氏は遂に衰え永禄9年尼子義久は月山城を開城し毛利氏に降伏する。塙治を名乗り塙治城に拠った武将たちの系統はこの頃までに絶えたようである。(今岡清)

(2) 朝山、塙治地域の城跡

古代、斐伊川、神戸川の2河川の下流部には大念寺古墳、篠山古墳に代表されるように大形古墳が営まれた地域であり、律令制時代にも朝山郷新造院という私寺や出雲國三軍町の一つ神門軍團や土塹烽の設置など、出雲地方西部において一つの大きな勢力があり、かつ、軍事上の要衝としての意味をもっていた地域である。

出雲市内には城跡として文献などから神西城、淨土寺山城、篠栗城、戸倉城、大廻城など20カ所程が知られている。しかし、その城郭遺構の実態については踏査調査にしろ報告例が少なく十分把握されていない。

ここでは出雲市内の城跡のうち朝山氏と歴史上殊に著名な塙治氏の居城跡があるとみられる朝山町から塙治町にかけて存在するいくつかの城跡について部分的な踏査をしたので、その概略を報告しておきたい。本来一定地域の丘陵部・縄をすべて踏査すべきであるが、それを実施していくなく踏査も不十分であるから今後補正される部分も多くあると思われることを付言しておきたい。

雲陽誌にみえる城跡

神戸川と斐伊川に挟まれた朝山から塙治あたりの丘陵部につくられた城跡について、黒沢長尚撰亨保2年(1717)刊行の『雲陽誌』には次のような城跡がみえる。

1. 古城山 世俗平家丸といふ安来城主しれす相伝朱雀帝承平年中の城なりといふ
2. 古城 唐黒山といふ
3. 古城山 塙治判官高貞の居城なり
4. 古城山 脊に岩窟大小20ばかりあり上朝山塙治境なり城主しれす(岩窟は横穴であろう)
5. 鮎山の古城 馬木・勝定寺の説明で「庭前に坂山あり古樹長大なり、東に大河ながれて鮎山の古城清々たり」とある

なお、江戸時代後期にかかれたと思われる『雲陽古城跡』には、「今市村 平家丸 但城主不



知」「上塙治村 大廻 但同断」「上朝山村 姉山 但同断」「同村 カラスミ 但同断」と載る。

これらの記述からここでは『雲陽誌』にみえる1から5までの城跡をそれぞれ、1平家丸跡、2唐墨山城跡、3大廻城跡、4半分城跡、5姉山城跡と呼んで記述をすすめる。

踏査した城跡

1) 平家丸跡 現在、県立出雲高校の敷地となっているあたりがそれにあたるが、出雲市の一の谷公園となっているあたりとともにすでに丘陵尾根部分には手が加えられ、城郭遺構についての状況を判断することができない。ただ『出雲一ふるさとの想い出写真集』にのる写真をみると明らかに郭があったことを確認できる。

2) 唐墨山城跡 朝山町集落の北側にある丘陵上に主郭がある。5万分の1(木次)の地図でみると朝山町の北東方向の標高237.5mのところにあたる。

この城跡の郭は細長い丘陵の尾根と一段高い山丘頂を削平してつくられている。主郭は大山櫻現を祭っている場所と考えられる。その広さは37m×22mである。そして、主郭を中心に北西側と南東側に郭が配される。北西側の郭は北西1郭、北西2郭の2つの郭からなる。北西1郭は主郭から20m離れて20×10mの平坦地をつくる。北西2郭はさらに90m下って、10×11mの平坦地をつくる。それより下方は急峻な斜面となる。

南東側には主郭から90mほどの間に7カ所の郭をつくる。南東1郭は主郭から4mほど下方に作られ8×6.5mの広さをもつ。そして幅4mの堀切があり、南東2郭となる。この郭の下方中央部から道がとりつき、その両側に郭が設けられている。尾根のくびれ部となる部分には16×13m南東の7郭があり、東側は道が土壘状となる。これらの郭の南には7郭とT字になるよう6×48mの細長い郭がある。これに続いて西の方向に細長い郭が1郭と東の方向は細長い郭、堀切、郭、堀切、急な崖となる。

この城郭は主郭の西側に郭を作ることのできる丘陵の張り出しがあるにもかかわらず、郭を作っていないこと、東南側に土壘を設けていること、堀切が東側にあることなどの点から北東側に対する防禦機能をもつ城跡とみたい。

この城跡の西側の丘陵に真言宗經藏派金剛峯寺・大坊寺がある。現在は小さな堂宇が残るのみであるが、大坊寺の東側一帯の丘陵地には幾段もの現在水田となっている平坦地があり、城跡の名残りともうけとれる。また、その一角には吉祥女の塚と称する古い様相の大形の五輪塔があり注目される。

3) 大廻城跡 明治9年に作成された第46区神門郡上塙治村「村作道長帳取調帳」には「字下沢角田沢より向山より向山半ヶ加九市村境迄」「字上沢ノ内判官井手より間府川迄」「字上沢ノ内間府川より大迫木谷マテ」「字上沢ノ内式斗代中谷より大廻井手マテ」「字下沢ノ内大廻本谷

池より式千五百拾番1出マテ」という記述がある。のことから大畠という地名は山上塙山村地内にあって、現在の向山園地から出雲自動車学校の北側あたりに求めることができる。

そこで、自動車学校の北側丘陵から長者原の丘陵地にかけて踏査してみたところ殆んど尾根部分はブルドーザにより原形を損い城郭遺構の片鱗を見出せない。しかし、向山園地の北側丘陵の西端部には明瞭な郭が残っている。これはかつて向山所在古城跡として紹介したことがある。即ち、この城跡は一辺30mの方形の主郭をおき、その西側に1郭、そして、その郭の南側に一郭、さらに下って丘陵の中腹地に一郭をおく。主郭の東側は自然丘を残し天然の土壁とし、丘陵の途切れるところで施切している。北側には5段ほどの小さい郭を配する。南側の麓の方に民家や向山園地があり、これらの平地は館があったと推測される地形である。この城跡は標高40mと低い丘陵に作られた城跡であるが、郭一つあたりの規模がかなり広くかつ、単純である。ただ館跡の裏山を加工しただけという感じで、山城跡として古い様相をもつものである。この城跡は東ないし北側に対する防禦機能をもつ。

4) 半分城跡 この城跡については大井谷城跡の一部とともに今回調査対象となった城跡であるので、その子細については省略するが、この城跡は相当広い範囲山丘や丘陵地に郭を配している。上郭あたりの土壘状などの城郭構造からは北側に対する防禦機能をもつ。

5) 姉山城跡 出雲市朝山町に所在する城跡である。神戸川と神原川の合流する地点の南接する山丘上に郭が営まれている。朝山神社や雲井滝のある丘陵からは北に隣接する山丘であるが、三方は前述の2河川によって囲まれている。鳥根医科大学の方からみるとあたかも独立丘陵のように屹立し、斜面は急である。最高部は190mある。

この城跡は山丘の北側半分に郭をつくっている。南側半分には郭は認められない。北側半分は丘陵の高まりが2カ所あり、それに応じて大きく2つの部分からなっている。このうち北側丘上に主郭が営まれている。主郭は16m×24mの不整形の円形である。主郭には土壁は認められない。主郭から北には幅の狭い帯状の郭が3段ほどあり、さらに、それらから東より下方には広い2、3段の郭があり、整美な土壘が残る。広さは60×24mである。郭の東側に接して主郭に通ずると考えられる幅2.5mの道がとりついている。そして、この道は下方にも下る道があり、その途中には6m×9mほどの小さな郭が2カ所認められる。

主郭の西側には2つの郭が丘陵を削ってつくられている。西1郭は18×10m、西2郭は18×12mある。この2つの郭の南側は自然丘のまま残るが、道にそって下ると小さな郭が2カ所ある。さらに下って鞍部部分にも郭がある。さらに南に丘陵を上ると郭が認められる。丘陵を平坦に加工し、幅の狭い、長い郭をつくっている。

なお主郭の西北下方の送電鉄塔付近には姉山大権現を祭っていたというが、今は北麓神原川を渡った藤原富吉宅裏に祭っている。南東の麓には地元の人たちが般様屋敷と伝えるところがある。

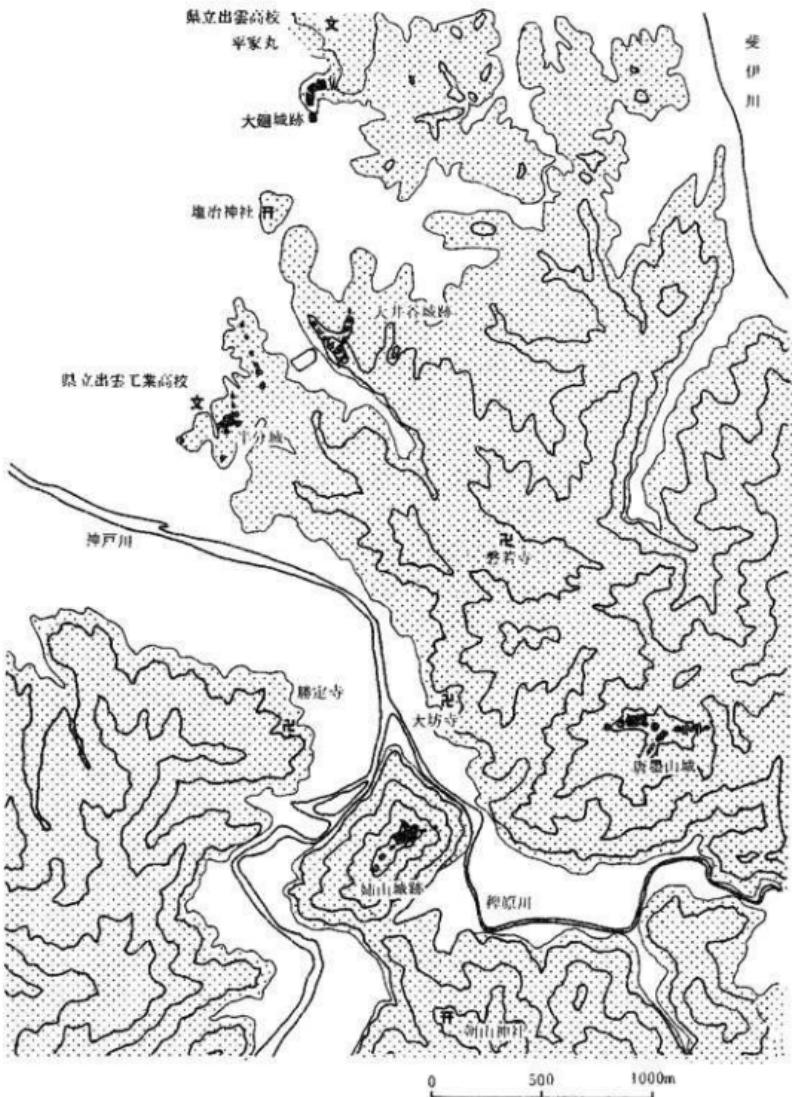


図21 朝山、塙治地域の城郭配置

これは、 $20\text{m} \times 25\text{m}$ の平坦状地で、石垣や井戸も残っており、一見して城跡とわかるが、往時のものとは推測しがたい。

姉山は突出丘が3カ所ある。頂上部分の北側2カ所を加工しているが、防備の機能を考えると北側の出雲市街の方向からの攻めに対するものであろうと考えられる。

以上、5カ所の城跡と今回調査対象となったうちの1つ大井谷城跡等を防衛といった点から考えると次のようであろうと推測される。

向山所在の城跡は北ないし東に対する防備機能をもつ。同じように半分・唐墨・姉山もそうである。ただ、大井谷城跡は南側に対する防備機能をもつとも考えられる。

従って、向山所在城跡・大井谷所在城跡は管沢から下沢の平地を守るかのようであり、半分・唐墨・姉山の各城跡は北方に対する防備機能をもつ城跡であろうと考えられる。

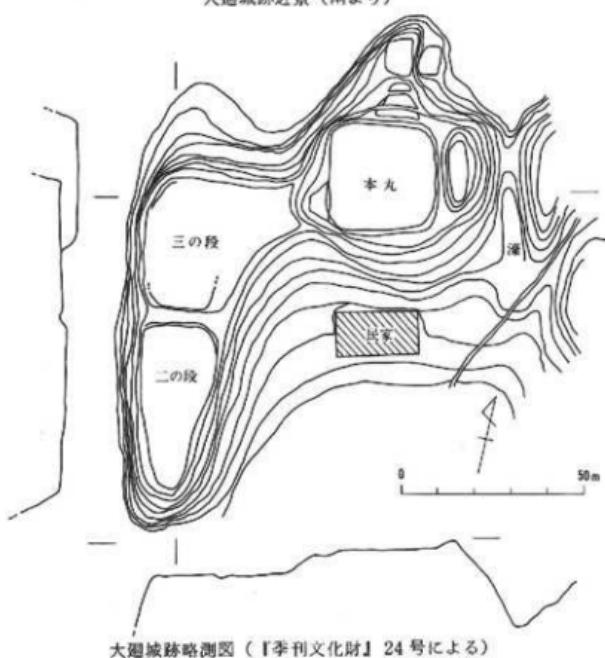
平野に近い平家丸跡や向山所在城跡が古い時期の城跡であり、より標高の高い丘陵に築かれた城跡は新しい時期の城跡であろうと考えられる。ただ、見張り的な弊と居城との区別を今後する必要があるが、箇跡が許されるならば、前者が塙治氏初期の城跡であり、後者が興隆発展していく段階（雲陽軍実記にいう塙治城）で移っていった城跡であろうか。

今後、箇跡の所在をも突きとめる必要がある。（勝部 昭）

図版VI 朝山、塩治地域の城跡(1)



大廻城跡近景（南より）





唐墨山城跡遠景（西より）



姉山城跡近景（西より）

1979年3月31日発行

中国電力高圧送電線鉄塔工事にともなう
大井谷城跡・半分城跡発掘調査報告書

発 行 出雲市教育委員会

印 刷 (株)報光社